

「日本名文鑑賞」について

土屋 博

日本名文のアンソロジーは文語の苑編「文語名文百撰」を始めとして世の中に数多あれど、戦前の高須芳次郎編著「日本名文鑑賞」(厚生閣、昭和十一年刊)全八巻は、小生にとりて座右の書の筆頭格なり。

その巻頭言に曰く、「本書は或る意味よりせば日本三千年の文學に對し鑑賞批評と共に註解、解説を爲したる新體の文藝史なり。また、日本三千年の文學を代表する名文のライブラリーにして、同時に如何に文章を作るかといふ問題についても一つの道を示すものなり」と。

小生思へらく、本シリーズを熟讀することは、豊潤なる日本文藝史を鳥瞰する又と無き好機となること必定にして、文語作文の勉強にとりても極めて有意義なりと信ず。

第一巻の冒頭には、饗庭篁村の源氏物語の讀み方、紹介せらる。篁村曰く、「多くの註釋を見るは悪きにあらねど、物語の意味を知らんとならば、先づ只本文をよく讀めかし。讀方よく本文を讀め、詞と地と文とよく分ち、口切よく讀めば、文義はひとりを通じ、讀みもてゆくうちに無量の味ひは出るなり」と。けだし、本シリーズの名文の數々をかくの如くに讀まば、文語のリズム、結果として身に付くこととなるらむ。

また、本シリーズの特色として、第八巻として「漢詩漢文」を別に掲げたることを擧ぐべし。見識ある判斷、取扱ひと覺ゆ。

責任編著者の高須芳次郎は、一八八〇年大阪生れ、一九四八年没。早稻田大學英文科卒の文藝評論家。號は梅溪。

なほ、本シリーズの推獎者に名前を列ねたるは、五十嵐力、北原白秋、佐藤春夫、島崎藤村、徳富蘇峰、長谷川如是閑、藤村作の各氏なり。

以下に「日本名文鑑賞」の構成を記さん。

「第一巻 古代中世」

敘事篇(源氏物語「須磨の秋」など)、抒情篇(六月晦みなづきつじもり大祓おほはらへなど)、敘景篇(徒然草「春夏秋冬」など)、史傳篇(平家物語「重盛諫言」など)、隨筆篇(枕草子「にくきもの」など)、エッセイ篇(古今和歌集序など)、日記篇(紫式部日記「法成寺」など)、書簡篇(平家物語「腰越状」など)、翻譯篇(源光行「蒙求和歌月下に語る」など)。

「第二卷 江戸前期」

敘事篇（近松「冥途の飛脚 新口村」など）、抒情篇（芭蕉「笈之小文 此一筋」など）、
、敘景篇（西鶴「好色五人女 山家風景」など）、史傳篇（白石「西洋紀聞 切支丹の事」な
ど）、隨筆篇（森川許六「風俗文選 わが風流」など）、エッセイ篇（白石「讀史餘論 源頼朝
と源義經」など）、日記篇（芭蕉「嵯峨日記」など）、書簡篇（徂徠「讀史について人に答ふ」
など）、翻譯篇（松雲處士「牡丹燈籠」など）。

「第三卷 江戸後期」

敘事篇（馬琴「南總里見八犬傳 芳流閣」など）、抒情篇（三馬「四十八癖 金を溜める人の
心理」など）、敘景篇（松平定信「花月草子 月・風・雨」など）、史傳篇（菅茶山「筆のす
さび 高山彦九郎」など）、隨筆篇（横井也有「鶉衣 百蟲譜」など）、エッセイ篇（本居宣
長「玉の小櫛 源氏物語について」など）、日記篇（有馬新七「都日記より」など）、書簡篇
（藤田東湖「午前は茗話 午後は微酌」など）、翻譯篇（高井蘭山「新編水滸畫傳より」な
ど）。

「第四卷 明治前期」

敘事篇（露伴「風流佛 美少女の彫像」など）、抒情篇（樗牛「清見寺の鐘聲」など）、敘景
篇（眉山「ふところ日記 漁村の夕」など）、史傳篇（上田敏「文藝論集 佛國詩壇の鬼才」
など）、隨筆篇（抱月「絢爛の文と平淡の文」など）、エッセイ篇（逍遙「小説神髓 小説の
主眼は人情にあり」など）、日記篇（獨歩「欺かざるの記 忘る、能はざる日」など）、日記
篇（眉山「うつせ貝 その戀捨て給へ」など）、翻譯篇（四迷「あひびき 秋」など）。

「第五卷 明治後期」

敘事篇（鷗外「雁 湯帰りの女」など）、抒情篇（藤村「破戒 追憶の林檎島」など）、敘景
篇（荷風「春のおとづれ 朧夜」など）、史傳篇（新村出「南風 詩人カモエンス」など）、隨
筆篇（露伴「長語 雨中の釣魚」など）、エッセイ篇（綱島梁川「病間録 秋の力」など）、日
記篇（紅葉「十千萬堂日録 金色夜叉の三害」など）、書簡篇（樗牛「病床から夫人へ」など）、
翻譯篇（鷗外「鴉」など）。

「第六卷 大正時代」

敘事篇（谷崎潤一郎「お艶殺し お艶と新助」など）、抒情篇（白秋「螢の指輪 珈琲の吐息」
など）、敘景篇（志賀直哉「蜻蛉」など）、史傳篇（藤村「晩年の一茶」など）、隨筆篇（露
伴「道路」など）、エッセイ篇（厨川白村「近代の戀愛觀 ラヴ・イズ・ベスト」など）、日
記篇（荷風「新緑の頃」など）、書簡篇（白秋「葛飾から伊太利へ」など）、翻譯篇（生田
長江「死の勝利 戀愛懷疑」など）。

「第七卷 昭和時代」

敘事篇（中里介山「大菩薩峠 月下の白刃」など）、抒情篇（大佛次郎「赤穂浪士 媚婦」など）、敘景篇（加藤武雄「郊外通信 武藏野」など）、史傳篇（白柳秀湖「岩崎彌太郎の冒険」など）、隨筆篇（橋本關雪「寫生について」など）、エッセイ篇（長谷川如是閑「日本國民性の特徴」など）、日記篇（吉屋信子「新春日記」など）、書簡篇（九條武子「佛の悲願」など）、翻譯篇（豊島與志雄「レミゼラブル 美の日覺め」など）。

「第八卷 漢 詩漢文」

（漢文）

敘事篇（安積澹泊「脱俗の人」など）、抒情篇（東湖「地下の父に告ぐ」など）、敘景篇（菊池三溪「彌陀窟の奇勝」など）、史傳篇（齋藤竹堂「林子平の一生」など）、隨筆篇（安井息軒「瀑布の圖に題す」など）、エッセイ篇（鹽谷宕陰「狐狸論」など）、日記篇（佐藤一齋「山行日記」など）、書簡篇（頼山陽「茶山先生に上つて仕官を辭するの書」など）。

（漢詩）

敘事篇（大久保利通「通州を下る」など）、抒情篇（黒澤忠三郎「絶命詞」など）、敘景篇（梁川星巖「藍川秋景」など）、詠史篇（頼山陽「蒙古來」など）、雜篇（廣瀬淡窗「桂林 莊雜詠」など）。

（令和二年八月六日受附）